
映 像 民 俗 18

「26回日本映像民俗学の会」総会の報告

代表 牛島巖
事務局 北村皆雄

今後の指針：センターの廃止と会則の改定について

今回の総会のテーマは、25回宮古大会以来懸案となっている各地域の活動拠点として作られているセンターをどうするかということであった。

会則には、「会の活動拠点として、各地にセンターを設ける」としており、運営委員会は、各センターの代表を加えて構成されている。これまで、東北センター、東京センター、関西センターという3つがあり、それぞれ独自に研究会などを持ち、活動をする方法をとってきた。

しかし、各センターを活動の拠点とするという方針は、実際には会則通りに生かされていないのでは？会員はその地域センターに所属し、活動するというやり方が、地域を越えた会員同士の交流を妨げているという弊害が生まれているのではないか？今のインターネットの時代に、地域のセンター中心の活動はマッチしないし有効とはいえないのではないか？などの諸点が、会員、また運営委員会でも、何回か検討がなされた。

そうした経緯を踏まえ、今回、運営委員会及び事務局の提案は次の2点である。

- ① センター制度の廃止。
- ② 会のホームページを作りネット配信と掲示板を通して会員間の交流をはかる。
- ③ プロジェクト制で活動する。

①については、25回大会で大枠として理解が得られたが、会則の変更を伴うものであり、1回だけの討論で結論を出すのは早急であるということになった。そこで会代表の牛島 巖と事務局の北村皆雄が中心になり、会員の意見を聞きながら最終案をまとめ、1年後の26回の総会に提案、決定することとした。

今回の26回大会に向け、牛島、および北村が中心になり、別紙の会則案、及び運営委員会のメンバー案を作り、運営委員会、および総会に提示し、検討を仰いだ。

②のホームページ作りについては、25回大会で実行に移すことが承認された。運営委員の巨純吉会員が責任者となりマスタープランを練り、駒沢女子大学デザイン科の協力を得て、現在作成中である。デザインはできたが、25回大会までの報告を集成するのに時間がかかっているが、夏には、公開できる予定である。なお、専用アドレスは、日本映像民俗学の会の英語表記名「Japanese Ethnological Film Society」か

ら、「jefs.org」とし、登録を済ませた。

② センターという地域枠での活動ではなく、意欲のある各個人の提案に基づくプロジェクト制にしたい。各テーマごと参加者をつどい、活動する。

とりあえず、以下の3つを提案する。

A) 映像民俗学論研究部会 新しい映像民俗学の思想、理論研究。

B) 上映鑑賞会 今までやってきた映像研究会の継続。希望者に提供。

C) 創る ひとつのテーマ、あるいはそれぞれのテーマで作る。グループを組んでもいいし、個人でもかまわない。

以上のような提案が総会でなされ、議論を経て承認された。

○ 改定された新しい「日本映像民俗学の会」会則

(1) 名称 日本映像民俗学の会

Japanese Ethnological Film Society

(2) 目的 会は映像民俗学の確立、その理論と方法の研究、並びに会員相互の親睦を図る。

(3) 会員 会の目的に賛同し、年会費2,500円を前納する。

(4) 事業 会の目的を達成するため、左の活動を行う。

A 大会及び総会

B 研究会

C 会報の発行及びWEBサイトの運営

D 映像記録による共同研究

E 民俗資料映像、講師派遣の斡旋

F 会員による諸活動の支援

G その他必要な事項

(5) 運営

総会において運営委員10名以内と会計監査2名を選出する。

運営委員の互選により、会代表を選出する。

会は総会の決議を経て顧問を置くことができる。

運営委員と会計監査の任期は2年間とする。

但し、重任を妨げない

日常の会務は事務局を構成して、これにあたる。

会則の変更は総会の決議による。

(6) 本部・事務局

本部：〒206-8511 東京都稲城市坂浜238 駒沢女子大学・人文学部牛島巖研究室気付
「日本映像民俗学の会」とする。

事務局：〒160-0014 東京都新宿区内藤町1-10テラス小黑201

「日本映像民俗学の会事務局」とする。

尚、運営委員会のメンバー及びプロジェクト担当は、以下のように決まった。

○運営委員会メンバー

牛島 巖（代表、再任）
北村皆雄（事務局長、再任）
間宮則夫（再任）
大森康弘（再任）
岡田一男（再任）
康 浩郎（新）
多比良建夫（新）
蛸島 直（新）
阿部武司（新）
新里光宏（新）
事務局 亘 純吉（機関紙 ニュースレター担当）
大塚正之（会計担当）
会計監査 松島岳生
芥川隆信

●以下の各プロジェクトを、若い人たちの参加で進めることになりました。

○ホームページ

亘 純吉（責任）/阿部櫻子/天野移山

○理論研究会

大森康弘（大阪担当）/鈴木岳海
牛島 巖（東京担当）/神 央/石倉敏明

○上映研究会

北村皆雄（東京担当）/遠藤 協/リモンド・アンドレ/吉松安弘（劇映画担当）
康 浩郎（大阪担当）/梅本史郎/
久保田堅市（京都担当）/

- 第26回大会は以下のように開かれた。

日本映像民俗学の会 第26回大会 日程

期日：平成16年2月21日（土）～22日（日）

場所：CAFE WASUGAZEN

〒105-0014 東京都港区芝2-3-25 NIKIビル

電話/FAX：03-3455-8075

■テーマ マチの民俗

今回は、多様な生きざまが錯綜する「マチ＝都市」にテーマをあて、映像がマチで生活する人々の心の深層をどのように切り取るかに迫ります。

マチの民俗を描くには「映像」が強力な手段となる、との認識は、本会設立以来、故宮田登（前顧問）や故野田真吉（前代表）が強調し続けてきたことです。

<マチ・都市>といものが捉えにくくなった現在、男女、仕事、歴史、風俗、信仰、民俗などが織りなすマチの多様性を映像化することの意義を再考します。

2月21日（土） 12:30 開場 一般参加者：参加費500円、学生300円

■特集<映像はマチをどうみたか>

- 13:00～13:30

「まだ見ぬ街」（15分）1964年 野田真吉監督

人目につかない脈々と流れている人間の生のいとなみの傷—それは原爆の街に今なお続いている—そういうしづとい人間の生命を感じさせる。

（評論家・作家 佐々木基一）

- 13:30～14:15

西陣（30分）1961年

松本俊夫監督 「京都記録映画をみる会」自主制作

織屋町、西陣の人々の生活意識のなかにひそむ歴史的、社会的なひだを描こうとした作品。戦後記録映画史に特筆すべきユニークな記録映画。

（野田真吉 日本ドキュメンタリー映画全史より）

60年代前半につくられた上記2作品は、必ずしも、マチの民俗を意識して捉えた作品ではありません。

<マチ>を描くのに、ドキュメンタリーとシュールリアリズムの手法を融合させようとしたもので、その抽象性の高い映像は、捉えがなくなった現代のマチを見るのに、一つのヒントを与えてくれるのではないか。

○ 14:15~15:45 特別講演

都市の肖像・川島雄三の映画「わが町」から小林忠雄

(会員、東京家政学院大学教授)

「都市民俗」を、色彩、音、ニオイなどの切り口から基本構造をさぐってきた小林忠雄氏が、映画監督川島雄三の映画を手がかりに語る都市の肖像。

○ 15:45~16:10 質疑討論 「マチと民俗について」

○ 16:10~16:50 「酉の市」(25分)

2004年駒沢女子大学映像コミュニケーション学科共同制作

19~20才の女子学生がはじめてビデオを回して編集した新宿花園神社の酉の市。

○ 16:50~17:55 「見世物小屋」(縮小版 65分) 1997年 北村皆雄監督+三浦庸子制作
祭りの日、町の賑わいに突然現れ、仮設小屋を立て、おぞましく、奇異、猥雑なものを見せて、去って行く旅芸人一座を内側から捉えた作品。

○ 17:55~19:00 「足立に記憶~北千住界限」(65分) 孝寿 聡作品

キツネツキなどの街の小さな妖怪、遊女にまつわる小さな異変などを、実際に体験したお年よりの証言に基づいて構成、マチの不思議な民俗を追う。

○ 19:00~21:30 懇親会

2月22日(日)

○ 9:30~11:00 総会

規約改正、委員改選、今後の方針などを話し合った。上記の参照。

□会員作品上映

○ 11:00~11:35 「上棟 牛島邸」(32分) 牛島巖

寓居建替え中。上棟作業は、頭(トビ)と棟梁(大工)とが分担しながら進む。2年ほど前から一般家屋に上棟にクレーンが導入された。現在の上棟作業のホームビデオ記録。

○ 11:40~12:30 「キパラハン:台湾先住民プユマの成巫儀礼」(40分) 蛸島 直

2001年の秋、台湾先住民プユマの1集落で4年ぶりに成巫儀礼が行われた。

トゥマラマオと呼ばれる病気治療を専門とするシャーマンを誕生させる儀礼である。2日間にわたって行われ、さまざまな儀礼場面から構成されるが、東方海上かなたに住むといわれる前任者の靈魂を招き、新任者に依り憑かせる場面が要となっている。

○ 昼食 12:40~13:40

○ 13:40~14:50 「サント・マリー・ド・ラ・メール巡礼」(63分) 大森康弘作品

(移動民の聖女サラ信仰)

ヨーロッパの移動民(ジプシー)の崇める黒い聖女サラが祀られている、カマルグ地方のサント・マリー・ド・ラ・メールの祭りは、5月24日に行われる。カーボー

イの発祥 地としても知られた地方色豊かな祭りでもあるが、教会の中では多くの移動民族たちの敬虔な祈りが響きわたる。

○ 14:50~15:10「オシマ参り」(30分) 多比良建夫作品

「丹後の漁撈習俗」で、このうち若狭沿岸の広範囲な漁村が、4月下旬から8月の間に、村毎に祭礼船を仕立てて冠島に参拝する。伝統的な参拝行事の行事次第の記録。

○ 15:10~ 6:00「亀島の精霊船行事」(44分) 多比良建夫作品

「丹後の漁撈習俗」で、丹後でも極めて古い漁村集落である与謝郡伊根町亀島の盆行事で、丹後地方でも特異な形態の精霊船行事の次第を記録した作品。

○ 16:00~16:45 「宮古島祭祀行事のレポート」(45分) 新里光弘作品

生まれ島の宮古で、常に内側のまなざしで番組をつくり続けている作者が捉えた宮古をレポートし構成した短編物。

今回は、予告編編集集団「バカ・ザ・バッカ」にご協力いただき、会場を設定しました。

会員から報告

「26 回映像民俗学の会」大会印象記

牛島 巖

日本映像民俗学の会第26回大会は予告編編集集団「バカ・ザ・バッカ」に協力いただき、2月21日・23日に、CAFE WASUGAENにて開催した。私事に互るが、丁度引越し時の合間で、疲れて空白状態での出席であったので、上映作品の記憶が曖昧のまま記します。

これまでの民族誌や生活誌の書き方について、種々の議論が出てきて久しい。学術用語を駆使した抽象度の高い記述にこだわらずに、対象とする社会の人々の経験を彼・彼女たちに「語らせる」工夫を実験的におこなったり、調査者本人の経験や反応をデータの中に組み入れるといった試みがなされてきた。調査対象と調査者自身の関係を俎上にのせることで、異文化と自文化の媒介者としての調査者の位置を明白にする必要が要請されたからである。また現実を「説明する」記述に加えて、現実の「表現」が求められてもいるからだ。現実の「表現」は民族誌的な小説、詩、メタファーの駆使、そして写真の添付、そして動態記録の活用などの工夫が考えられる。こうした指向は、今日調査経験全体を多面的に表現することが要請されていることを意味する。これらの「現実の表現」に関しては、映像民族誌学の世界で古くから論議され、実験され、工夫されてきたことだ。それにもかかわらず人類学者や民俗学者に対する影響は僅かな局面に限定され、遅々として進まない。民俗学者と記録映像作家との対話の進展も未だ遅々たる情況

ではないか。「日本映像民俗学の会」は、この状況をしっかりと認識し、活動の原点に置くことが肝要ではないか。

第26回大会を振り返った時点での、総括的な印象は、このようなことであった。今回はマチを描いた映像をテーマにしたが、多様な局面を持つマチの映像は、また多面的な表現手段があることは解る。ただ記録とはなんだろうか？野田真吉の主観を表現した「まだ見ぬ街」をどう見たらよいのか、とまどう。原爆の街、どぶ川に始まりどぶ河の流れに終る短編は、人間の営みに生命を感じた詩人の記録なのだろう。戦後の記録映画史をかざるとされる松本俊夫の「西陣」は、前近代的な手工業の街の俯瞰から始まる。絶えず動く織機、流れる糸、それを操る手のアップを多用した編集にはリズムがあるが、人間は表現から消える。職工はものの一部に変換されて表現される。現実を映した映像記録であるが、シュールな表現が強烈な作品だ。

昭和31年制作の日活映画、川島雄三の「わが町」から、明治・大正・昭和にわたる大阪の下町生活風景とその変化を読み取る作業を報告してくれた小林忠雄の講演に、一つの深化があった。「わが町」に近代初期の都市生活様式についてのモデルが表現されている。民俗学で最近論議されている課題の一つが「伝承と記憶」である。現実をリアルに把握できない時代の掘り起こしには記憶の再生装置を必要とする。筆筒の中や写真アルバムなどがそれに相当するが、「わが町」などの映像作品も無視できない媒体であろう。これは記憶の記録化という作業に通じる。孝寿 聡の「足立の記憶—北千住界限」は「記憶を撮った」作品だ。孝寿は記憶映画と表現する。古老達の記憶は理路整然とはしていない。この作品における媒体は記憶された地図である。対象が指示する場所がカメラポジションであり、そこで老人の記憶がよみがえる。カメラは人々の記憶を写り込む。

北村皆雄・三浦康子の「見世物小屋」は、旅芸人一座を内側から捉えた作品。通常の生活ができない人々を抱え込む場として一座の内幕を知ることができた。ただ奇異、猥雑な見世物で成り立つ興行は、見物人を騙す世界でもある。この局面の掘り下げが欲しかった。最近会の会員がすこしずつ若返っている。駒沢女子大の女子学生がはじめてビデオを回して編集した「酉の市」には、新鮮なまなざしが表現されていた。今後の進展を期待する。(牛島記 4月16日)

会員の映像印象記

北村皆雄

大会二日目、総会の終わったあと、会員の作品が上映された。その印象を率直に述べ、会員、参加者の反論をうながしたい。

会員の映像の撮り方、利用の仕方はさまざまであろう。民俗事象を個人のメモとして記録する者もいる。これは、他者に見せることを想定したものではないのが普通である。

さらには、撮影対象が遠からず消えようとしている折、映像の立会いは一回性であるという強い衝動から、将来、再現できるように、できるだけ長く記録しておこうと考え、長時間記録することもある。

その全フーテージは、その参加者や関係者だったら観ても楽しいが、一般の者、第三者にとっては、いささか耐えられない時間になる。

わたしの個人的な感想を述べると博物館学の新しい分野を標榜する孝寿 聡作品の「足立の記憶～北千住界限」は、方法論としては興味をそそられたが、一般者、第三者として観るということに関しては、いささか苦痛を伴うものだった。

牛島さんは、人類学者でありながら、映像の世界に入り、フィールドでカメラを回し、作品を作り続けている第一人者である。

今回の上映作品「上棟 牛島邸」は、すでに伝統的な家屋建築の際の儀礼を失った東京での自宅建設を記録したものである。

これについても、想像できる以上の事実や発見があったわけではなかったの、ああそうなのか、という追認的な映像の確認に留まった。現状を確認することに意味もあるが、ああそうなのか、と言う以上の発見を求めたくなるのである。私は、改めて、記録するとは何か、人に見せるとはなにか、ということを考えさせられた。

蛸島作品の「キパハン：台湾先住民プユマの成巫儀礼」は、研究者である蛸島さんが、長年研究資料として映像記録したものの一つで、成巫儀礼の長大は記録を40分に編集したものである。カメラの利用の仕方、撮った映像にコメントをくわえていくという方法は、彼の一つのスタイルになっている。いままでの膨大な映像資料を、項目別に編集し、われわれにも随時観られるようにしていただきたいと思う。

「オシマ参り」「亀島の精霊船行事」は、丹後の漁撈習俗を撮ったものであった。多比良さんは、40年ほど前の学生時代からお会いしており、同じ映像の世界に生きてきたが、私はどちらかというとテレビドキュメンタリーの道を歩み、彼は、短編映画界で一貫して映像を作ってきた。電通系の映像制作会社で、「多比良」といえばかなり著名で、良質な作品をつくることで評価が高い。

今回の作品を観たとき、私などがテレビで作る手法（インタビュー多用、短期間の取材、飽きさせないような速いテンポなど）からみると、かなり丁寧に撮影をしている。しかし、私は、同時に、ナレーション中心の解説といった従来の短編映画の方法論から、もうすこし踏み出してみたら、どんな作品になっただろうという思いにつきまとわれた。多比良さんの新天地での活動に、是非新しい方法論で挑戦していただきたい、と思っている。

新里光弘さんの「宮古島祭祀リポート」は、都に根をおろして撮影し、編集し、報告もやるという方法論で、独自の映像を作ってきたなかでの作品である。

かつて、日本の文化に、「島」というものの持つ文化の重い刃を突きつけてきたところが、今、解体期を迎えながら、なおかつ魅力を失わない不思議な世界を、私たちに見

せてくれることが、なによりも新鮮である。今後を期待したい。

最後になったが、大森作品「サント・マリー・ド・ラ・メール巡礼」をみて、「言葉の力」「歌の力」というものを感じさせられた。字幕で流される歌の歌詞に、明確な意味付けがなくても、すさまじい世界を垣間見させてくれた。

私も最近「修験～羽黒山・秋の峯」を作り、祈りのお経を字幕で出し、「お経の力」といったものを、認識していた時だけに、強く印象に残った。

大阪から参加された梅本史郎氏（会員）の寄せられた感想を、紹介して、私の印象記を終わりにしたい。

梅本史郎さんからのメールより～

「総会ではとりわけ大森先生のサンマリドラメール巡礼は面白かったです。私事ながら私もドイツ駐在員時代に5月の祭りを取材しようと企てて果たさず、旅行で現地を訪れたことがあります。

大森先生という言葉逐語訳によって、キリスト教がいかにもうまく移動民をとりこんでいったかが本当によくわかりました。

おそらくフランスに、いわゆるジプシーがやってきたのは15世紀初めで、それも最初はカトリックの国々で定住もしくは放浪していた人たちだけだったに違いありません。

大森先生には申し上げたのですが、普段はサラの像が所詮地下に安置されていることを映像でわからせて欲しかった。それと東欧のロマたちも参加している、と先生はおっしゃっておられたのですが、おそらくそれは共産主義崩壊以降の新しい現象で、それと正教の関係がどうなっているのかも知りたかったです」

サント・マリー・ド・ラ・メール巡礼

58分 カラー

（移動民の聖女サラ信仰 — 2004年2月完成）

大森康宏（国立民族学博物館教授、会員）

ヨーロッパの移動民（ジプシー）の崇める黒い聖女サラが祀られている、カマルグ地方のサント・マリー・ド・ラ・メールの祭りは、5月24日に行われる。カーボーイの発祥地としても知られた地方色豊かな祭りでもあるが、教会の中では多くの移動民族たちの敬虔な祈りが響きわたる。

今回、日本映像民俗学の会で上映したこの作品は国内外ともに初公開である。この作品の主旨は、映像によって言葉の意味を具現する構成となっている。このことはすべての儀礼・儀式においてはさせられる言葉のもつ広がりをごくまで映像で伝えられるかを実験したものである。したがって、フランス語で語られる言葉はタイミングよくすべて

翻訳されており、ラテン語も原文をつけて翻訳してある。

「兄弟たちよ、神の創造したこの大地はあなたがたさまよえるジプシーのものであり、また他の兄弟のものでもあります。そして、あなたがたは、すべて神の子であり、家族なのです。ある日、あなたがたの一人が、ジプシーの民族から、他の民族に変わったとしても神の前には、みなすべておなじ子であり、家族なのです。イエス・キリストの母である聖母マリア様は生命の泉です。あなたがたに生命あるかぎり、まことの神の子孫であることを信じて、困難な人生の道を歩まねばなりません。神は、あなたがたとともにいるすべての女性のなかで、聖母マリア様を選んだのです。聖母マリア様は、あなたがた罪深き人々のために祈り、あなたがたの至福と恵みをおおきことを願って祈っているのです。ジプシーたちよ、あなたがたの子孫の一人、聖女サラは、この地、サント・マリー・ド・ラ・メールにおいて、聖母マリア様の姉妹にお仕えした人なのです。サラのために祈りましょう。」

15世紀半ばにジプシーたちがヨーロッパの西部と中部に姿をあらわしたとき、カトリック司教の手紙を持参しつつ西へ向って移動してきた。その手紙にはいずれも、エジプトからの神の使者であるジプシーを庇護するように、受け入れ国の王や領主にあてて書きつけてあった。これらの手紙はまた、今日の通行ビザの役目をしてきたことが記録に残されている。1427年のパリ、1429年のアミアン、そしてオランダでは15世紀から16世紀にかけて、おおくのローマ司教発給のジプシーのための護照の手紙が発見されている。

巡礼によって異文化のなかでの安全な生活保障を手に入れてきたジプシーの民族的知恵は、現代にまで引き継がれている。

マリー・ジャコベの祭り

地中海に面した人口2000足らずの小さな町、サント・マリー・ド・ラ・メールは、毎年5月24日と25日（マリー・ジャコベの祭り）そして10月22日（マリー・サロメの祭り）の2回の祭りの期間中、おおくのジプシーでにぎわう。とりわけ、5月のマリー・ジャコベの祭りは、町をあげて盛大に催される。祭りの日付は、マルセイユの司教が1449年に定めた勅令にしたがっている。

教会の北側の小さな入り口からはいると、二人の聖女、マリー・ジャコベとマリー・サロメが祀られている。そして地下室には、ジプシーの崇めるエジプト女のサラがまつられている。

カマルグ地方の伝説によると、紀元40年、つまりキリストの死後12年たったころ、聖母マリアの姉妹である聖マリー・ジャコベ、聖ヨハネと聖ジャック・マジュールの母である聖マリー・サロメ、そしてこの世に生き返ってタラスコンに布教した聖マルスや、マルセイユ地方に布教した聖マリー・マドレーヌ、その他数人の使途とともに、ユダヤ人の手によって地中海のイスラエル沖に置き去りにされた。このとき、二人の聖マリーの召使であったサラは陸に取り残されたが、聖マリー・サロメが投げた外套に水をかけると、第一回目の奇跡が起こったのである。外套は筏に早変わりして、聖女たちのいる小舟までサラを運んでくれた。小舟には櫂も櫓もなく、食料もなく、ただ潮の流れにまかされた。が、神のおかげで、フランスのカマルグ地方に漂着した。そして第二の奇跡が起こった。彼女たちが流れ着いた塩水の湿地帯の場所に、真水の泉が湧き出てきたのである。

聖女たちとサラは奇跡的にたどり着いたこの地に礼拝堂を建て、当時この地方を占めていたゴール人にはじめてキリスト教を伝道するため、聖女たちはプロバンス地方、現在のアックス、マルセイユ、アビニオンなどで布教につとめた。聖マリー・ジャコベと聖マリー・サロメ、そして召使のサラは、カマルグ地方に残った。サラには Sara la kâli という名がついており、黒い女とよばれていた。カマルグに残った二人の姉妹の聖女とその召使サラが死ぬと、その遺体はこの礼拝堂に葬られた。その後、12世紀になって今日のような教会が建てられノートルダム・ド・ラ・メールとよばれた。

1448年にプロバンスのアンジュー家のルネ王が、二人の聖女と召使サラの遺体と聖遺物の箱を掘り出した。そして、二人の聖女は教会に正式に祀られたが、サラは今世紀になるまで真正の聖女とみなされず、いまま地下室に置かれている。かつて置かれていた場所には泉の湧いた古い井戸が残っている。

移動生活民ジプシーとは

彼らは6世紀から7世紀にかけてインド北西部から移動を開始した。その原因は現在でも判明していない。そして14世紀になって東部ヨーロッパやバルカン半島に移ってきた。インドからヨーロッパに至るまでの詳しい資料は数が少なく、その歴史の変遷については仮説しかたてられていない（他の地域も参照）。

ジプシー自身の名称はヨーロッパに着いてから名付けられたものである。Gypsyという名は、エジプトから来た者たち（Egyptian）に由来すると言われている。またフランス語のTsiganesはギリシャ語のAtsinganosに由来するとされている。その他ジプシーを軽蔑してボヘミアンなどとも呼んでいる。

これに対して彼らは自身は、サンスクリットに由来する「人間」を意味しているマヌーシュ（Manouche）という呼び名を使用したり、「人」を表すロム（Rom, Lom）などを用いている。そして彼らが「自分以外の人々」を呼ぶ場合には、ガジヨ（Gadjo）とい

う呼び名が使用される。

都市の映像学のために

石倉敏明

(中央大学大学院総合政策研究科博士課程)

都市には、多くの非人間が暮らしている。昼間の公園、郊外の住宅地は、彼らの主たる活動場所だ。人気のない路地に集う犬や猫、空に舞うハトやカラス、地下に張り巡らされた通信網や上下水道、身奇麗な街路樹、虫たちの群れ……。夕刻になると、人間たちの群れが合流し、都市は華やかな顔を見せはじめる。点灯するネオン、会社帰りのサラリーマン、車のブレーキ音とヘッドライト、塀の傍らに寝そべる猫、若者の弾くギターやヴァイオリンの音、コンビニエンス・ストアから漏れてくる蛍光灯の明かり、ゴボゴボと汚水を排出しつづける排水溝……。

それらすべてが渾然一体となって、混沌とした雰囲気醸し出している。混成した空気は夕闇の中で次第に膨張し、繁華街の喧騒の中で、最高潮に達する。それは、人間と非人間が混ざり合い、それぞれの欲望を満たそうとする、現代の聖域なのだ。こうした場面を織り成す、渾然となった雰囲気は、かつては祭りのようなくハレの場面だけに、許されていたものだった。いまでは夜毎に、神聖な儀式性を欠いた、激しい欲望の噴出が、あちこちで湧き起っている。夜の繁華街には、くハレの雰囲気がみなぎっている。人びとを高揚させ、財布の紐をゆるめさせてしまうような、独特の浮き足立った雰囲気が、そこにはいつも漂っているのである。

どの通りにも、独特の匂いや味わいがある。その雰囲気は、人間と非人間の共同作業によって、長い時間をかけて、醸成されてきたものだ。無関心な通行人、浮気な買い物客、腹を空かせた子ども、孤独な出稼ぎ労働者、映画好きの学生など、雑多な人々が行き交う、生存のための多層的なテリトリーが、街には用意されている。そこではいくつものテリトリーが隣接し、重層しているのである。人びとは短時間のうちに、あるテリトリーを抜け出し、別のテリトリーに逢着する。私たちはそこを歩いているだけで、いくつもの次元を、通過することになるだろう。たとえ地理的には狭くとも、街はきわめて広大な空間であり得る。街は、そこを横断するスキルを身につけていないものにとって、混沌としており、複雑な迷路のように、入り組んだ空間である。

夜の繁華街を歩く人びとは、地面から数センチメートル上を、フワフワと飛ぶように歩いている。彼らは弾力のある、ツルツルとした平面を、どこまでも上滑っていくかのように見えるのだ。かつて折口信夫は、こうした上滑り気味の空間を揶揄して、「ぷりぷりと跳ね返る現実」と呼んだのだった。近代人の性質のひとつは、複数のテリトリーを行き来する、こうした「身軽さ」なのだろう。都市の住人は、じっさい複数のテリトリーを横断し、離陸と着陸を無限にくり返しながら生きている。彼らつまり、ある次元から別の次元へと、何の

苦もなく、跳び移っていくことができるのだ。

しかし彼らの足もとには、数十年から数百年、数千年、数万年にもおよぶような集合的な記憶が、密かに眠っているのである。たとえばパリという都市は、その地下に巨大な「不可視の空間」を抱えている。ヴァルター・ベンヤミンは複雑なメトロの構造を、ギリシア神話に出てくるミノス島の迷宮にたとえ、毎朝たくさんの女店員や会社員が、巨大なミノタウロスに呑み込まれる様子を夢想した（『パサーージュ論』）。哲学者のミッシェル・セールは、エッフェル塔の地下に横たわる巨大な地下鉱脈から、エレベーターによって「人間の噴水」がいきおいよく噴射される様子を、詩的に描き出した（『彫像』）。最近では社会学者のブリュノ・ラトゥールが、人間とモノの集合体として形成された都市空間を、見事な手腕で可視化することに成功している（『不可視の街、パリ』）。

パリと同様に、東京も巨大な無意識を抱えている。たとえば江戸や武蔵野の地下には、新石器時代以来の人間の記憶が眠っているのだが、こうした記憶は小さな石の祠や、石仏の類として、非常に目につきやすい形で、表現されている。柳田國男はそこに、古層の「石神」なるものを発見した（『石神問答』）。若い柳田の抱いた、時空を越えたモノとの出会いによって覚まされる新鮮な驚きを、私たちは今も、この生身のからだで、追体験することができる。私たちににとっての「民俗」とは、そのような驚きをもたらすものにほかならない。新宿の小さな飲み屋やデパートの中にさえ、大きな熊手を掲げて一年の招福を祈るような「民俗」が、ひっそりと息づいているのだ。

なるほどヨーロッパのような地域とはちがって、私たちの知っている「民俗」は、地下に埋葬されているのではない。それらはむしろ、私たちの足元に、何気なく転がっている。あるいは野草のように、私たちの周囲に、繁茂している。アスファルトの傍らにあって、しっかりと自らのテリトリーを主張する蒲公英の花のように、私たちの「民俗」は、たくましく佇んでいるのだ。雑踏にあふれる、上滑りで、ぷりぷりと跳ねかえるような現実の傍らには、どこまでも古代的な「民俗」が——祖先の歴史を刻み込んだ現実が——漫然と併置されているのである。

都市の民俗を対象とする映像は、こうした日本的な現実の多層性を、しっかりととらえなければならぬ。そのためには、とりわけ暗闇の奥を見つめる鋭い眼力と、またそれを適切な仕方で可視化する技術が、必要とされるだろう。

* * *

都市は、経済活動の中心であり、モノや情報が行き交う「流通」の中心でもある。また物理的な「交通」の結節点でもあり、じっさい、ものすごいスピードで、車や地下鉄や人間が、その上を通り抜けていく。夜になると、昼間は空調の効いたオフィスや学校に居たサラリーマンやOLや学生たちがどっと繰り出してきて、ささやかな「消費」の活動を、おこないはじめる。そしてそれらの活動が、夜の労働者の家計を支え、ひいては街全体の「経済」を、

流動させていく。

映像は、このように構造化された経済活動の条件を踏み越えて、その背後に隠された欲望の生々しい流れ（それこそが都市の無意識の実態である）をとらえ、生成状態にある現実の姿を、明らかにしていくことができる。また、電信網の基幹となる設備や上下水道の構造を視覚化し、交通網の様態をとらえて、モノと人間の隠された連帯を、明らかにすることもできる。アーヴィング・ゴッフマン風に、人間の営みを、動物行動学的に観察することもできる（たとえばワイズマンのすばらしい作品群を参照されたい）。そしてあらゆる手段を駆使して、人間の生活の深層に横たわる、あの不可視の「民俗」という領域に触れることさえ、可能である。

映像民俗学にとって、都市とは、このようにさまざまな可能性を孕んだ空間として、立ちあられる。映像は都市の重層的なテリトリーを貫く現実——それは本質的に流動的であり、不定形なものであるのだが——に形を与え、不可視の現実を、眼に見えるものに変えていくことができるのである。私たちは最近、アニメーション技術の革新的進歩によって、こうした「民俗の可視化」が、いささか性急な形で遂行される状況に、直面しているのかもしれない。ドキュメンタリー映画は、現実の映像を素材にして、「民俗」をもっと周到に、再構成することができる。それは私たちの眼の前に転がっている、ありふれた光景を基にして、そこから歴史の深層に分け入っていくための視覚的な装置として、自らを鍛えていくことができるはずである。

それでは、「都市の民俗」をしっかりと、とらえ得るのは、一体だれの視点だろう。いま、私の心に想い浮かぶのは、フィールドからカメラを持ち帰り、ようやく都市の生態に眼を向けたばかりの、学者たちの姿なのではない。私たちを見つめているのは、人間ばかりではないのだ。たとえば機械化された、非人間の<眼>が、都市に暮らす私たちの振る舞いを見つめ、記録している。コンビニ、デパート、高速道路、学校では、今やいくつもの監視カメラが、無言のまま私たちの姿をとらえている。一日に数回、数十回、百回以上も、私たちは彼らの<眼>によって記憶（＝記録）される。私たちはそこでは、無数の匿名のカメラに晒された「被写体」に過ぎず、名前を奪われた匿名の群衆の一員として、都市の光景に埋没している。

しかし、それならば、もしも、これらの監視カメラを十分に活用し、撮影された映像を利用することができたなら、私たちは「都市の民俗」を精確に記録する素材を、得たことになるのだろうか。映像による、視線の遍在とその不可視性——この問題は、ヴィム・ヴェンダースによる、有名な映画（『ベルリン天使の歌』）の主題を思い起こさせるかもしれない。ここでは、人間の眼には見えない天使が、主体と対象の分割を超えた「第三者の眼」として、都市に住む人々の生活を、じっと見つめていたのだった。人間を見つめる「第三者の眼」を主題として取り上げたヴェンダースは、明らかに、人間の心のすべてを見通すといわれるキリスト教の「熾天使」（セラフィーム）のイメージを具現化し、現代に蘇えらせようとしている。

しかし「監視カメラ」と「天使の眼差し」の間には、重大なちがいがあある。たしかに両者はどちらも、人間に気づかれていない次元（不可視の次元）から、私たちの姿をとらえようとしている。けれども、「監視カメラ」は都市の経済にとって「異質なものを発見し、それを排除するためにもちいられる。これに対して「天使の眼差し」（＝「第三者の眼」）の方は、都市を貫くあらゆる時空に遍在していながら、いかなる異質性をも排除しない。しかも前者があくまで一方向的な超越性に留まるのに対して、後者は人びとの営みの実態、その微細な襞の奥の奥にまで、這入り込もうとする。このちがいは、「記録」という行為にかかわる、重要な基準を為しているように、私は思う。

「天使の眼差し」という表現が、あまりにもキリスト教的だとしたら、改めて「精霊の眼差し」と呼び直してもいい。「精霊の眼差し」は、日常的に見慣れた現実ばかりでなく、昼間の都市から排除された現実、不具的なもの、汚辱に塗れたもの、スティグマを帯びたものを熟視し、社会の内側の、さらに奥の奥にまで這入りこんで、超越者の視点からおこなわれる、排除の構図さえをも、明らかにしようとする。そして、人びとの営みにあらわれた弱さ、おぞましさ、おそろしさ、哀しさ、狂気、儂さの中から、「都市の民俗」というものを、浮き彫りにしてしまう。あるいは生者の営みの一切を、死者の視点から、何一つあますところなく、明らかにしようとする。要するにその眼差しは、「人間」にかかわるすべての出来事を、包摂しようとするのだ。

21世紀の「映像の民俗」は、私の言う「精霊の眼差し」を、普遍化しようとするものになっていくのかもしれない。二日間にわたった今回の大会で、私たちは「精霊の眼差し」を持った、たくさんのすぐれた作品を、観ることができた。いくつかの作品は、私たちの視覚を揺さぶり、見事に「民俗」の幻影をたちあがらせることに成功したようである。とりわけ感激したのは、お盆の「精霊船」の行事を記録したものと、秩父の夜祭を記録したものだ。どちらも「精霊」や「死者」や「芸能者」の側に立って、彼らの側から、鋭く世の中を見つめ返そうとしている。とくに、何度観ても心臓がもたないのは、あの見世物の観衆をとらえた、ユーモラスなシーンである。

私たち観衆が、ポカンと口を開けて、芸に魅入っている映像だ。あれを観るたび、私は冷や汗をかくことになる。死者や精霊たちに、見られている感じがするからだ。スクリーンの背後からあらわれた彼らは、私に向かって、こんなふうに語るのを、やめようとしない。「観られているのはお前のほうだ。私の本当の姿が見えるのか。生きているものだけがすべてではない。死者を見つめ、死者に見つめられる感覚を意識しろ」と。都市の映像学にとって、アルファであり、オメガであるもの。それは、自らがあの「第三者の眼」となって、世界を見つめ返すという、奇妙な夢のような現実なのではないだろうか。

新入会員

崔 吉城（ちえ・きるそん） 東亜大学大学院教授
〒739-0044 広島県東広島市西条町下見5-5-33
電話, FAX: 0824-24-1540
e-mail: dgpyc081@yahoo.co.jp

岩谷彩子（いわたにあやこ） 京都大学人文科学研究所
〒602-0821 京都市上京区後藤町184 B-22
電話, FAX: 075-225-4006
e-mail: ennui@skyblue.ocn.ne.jp

リモンド・アンドル 日本留学中
〒168-0065 東京都杉並区浜田山1-4-12
電話: 090-6159-4946
e-mail: andyimond@yahoo.cs.uk

李 鎮栄（Lee jin Young） 名桜大学助教授
〒901-2224 沖縄県宜野湾市真志喜2-26-15
電話, FAX: 098-897-6690
e-mail: okilee70@ybb.ne.jp

山本芳美（やまもとよしみ） 都留文科大学専任講師
〒160-0008 東京都新宿区三栄町14船木コーポ202
電話: 03-3353-9545
e-mail: yosyj@hotmail.com

石倉敏明（いしくらとしあき） 中央大学大学院総合政策研究科博士課程
〒192-0351 東京都八王子市東中野1429-7
電話: 0426-76-9569
e-mail: tishikura@hotmail.com

天野移山（あまのいざん） 中央大学大学院総合政策研究科博士課程
〒236-0022 神奈川県横浜市金沢区町屋町6-9
電話: 045-701-1296

e-mail: izan@yahoo.co.jp

★追記：設立当時（1978年）からの会員、緒方宏子さんが昨年（2004年）の11月3日、諸岡青人さんが、12月26日に逝去されました。謹んで冥福をお祈りいたします。

★今年度の大会は、2005年2月19日（土）、2月20日（日）の両日を予定しています。長野県飯田市の「飯田市美術博物館」で、会員の桜井弘人さんのお世話で開催する予定です。

テーマとしては、「三遠南信地域の民俗」を考えています。

この地域周辺は、花祭り、霜月祭り、雪祭り、西浦田楽などの民俗の宝庫です。

この地域の民俗映像作品を集め、また飯田市美術博物館、柳田國男記念伊那民俗学研究所の協力で実現させたいと思います。

尚、本年、1月30日に東京でおこなった、日本映像民俗学会の研究会で、新会員の李鎮栄さんが、大変興味深い発表を、映像を交えておこないました。

その要旨をここに載せておきます。

日本映像民俗学の会 研究会

実践 記号学への招待

「言葉と実体：身近な人類学」～映像人類学の実践・教室からの報告～

今回は、沖縄の名桜大学国際学部助教授の 李 鎮栄さんにお越しいただき、研究会を開きます。李さんは映像人類学にも造詣が深く、かつ実際に講義で生かしています。

今回はその授業の実際を展開していただきます。

私が、授業で映像を用いる 15 回分の内容は以下のとおりである。

講義の主題

- 1 汚さの正体、2 すべては分類、3 分類できない領域、4 異なる分類の世界、
 - 5 境界領域、6 境界の性質のさまざまな表現、7 宗教を生む心
 - 8 神が人間を作ったか？ 9 お年玉の秘密、ただより高いものはない、
 - 10 ビールの飲み方、11 自分の芋は他人にあげる、12 持ち物が少ないのがえらい、地位の差・不平等の問題、
 - 13 贈与交換の世界、14 物を交換する、15 他者への眼差し
- 2-2 言葉を持たない人間の世界<野生児・狼少女・ヘレンケラーの世界>

*90分授業の内、長いもので50分を超えないように工夫している。

*授業の流れに沿った映像が提供されるのでその長さは2-3分ほどの短いものから数十分の長いものまでである。日常の身近な事例から分析を始めることで、親密感を持って授

業に臨むことができる。身近な例も、考えてみると深い意味があって、これらの意味の体系を理解することが大事であることを身をもって体験させる。

実践

言葉と物の結びつきの発見：つばが汚いのは、なぜか？

「汚い」という観念自体には実体がない。

<唾の映像>：マヨルカ族の映像（3分）、諸部族の唾酒の映像（5分）、

探偵ナイトスクープの映像（5分）、琉球王朝時代の酒の発酵の手段の資料提供。

「汚い」というものの実体があるわけではなく、「ある状態」を「汚い」と分類した結果、汚く感じるわけである。つまり分類に従っただけで、分類を共有する最大の単位が民族といえる。

空間認識も同じ：レレ部族・ヤノマミ族の空間認識

<陰陽師の画像>：名前は最も短い呪、夜空の星を彼女・彼にプレゼントしよう。

<MEHINAKU 部族>：自然・幸せという言葉がない=いつも幸せ。

<山>の絵がかけないラオスの山岳民族の子供たち。

「アフリカ大自然の旅」で訪れるマサイランドには「自然」がない。

アマゾン大自然の中で生きている「ヤノマミ」にも「自然」がない。

夕方の<夕日の写真>不気味、ロマンチック、

何でロマンチックに感じるか？ 夕方の曖昧さ、境界性、境界領域は特別（±）である。

【解説：名桜大学国際学部 李 鎮栄】

映像民俗 NO. 18

発行日 2004年5月15日

ニュース・レター映像民俗編集部

日本映像民俗学の会事務局

〒160-0014

東京都新宿区内藤町1-10 テラス小黒
201

☎ 03-3352-2291 FAX 03-3352-2293

E-mail: kita@vfo.co.jp
